HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	仮名草子の流行色 (二)
Author(s)	野田, 寿雄
Citation	北海道大學文學部紀要, 8, 103-126
Issue Date	1960-06-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33254
Type	bulletin (article)
File Information	8_PR103-126.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

仮名草子の流行色（二）

野田寿雄

仮名草子の流行色（二）

野田寿雄

六　中世風物語の流行

仮名草子時代の最も小説らしい小説といえば、この分類の中世風物語こそが、それに当るであろうが、ただ中世風という断り書きが附いているように、この期の小説観は大体において中世、特に室町時代の小説観を受け継いでおり、従ってその小説の特色もほとんどが室町風小説、云いかえればお伽草子風小説の特色に蔽われていたと称しても過言ではない状態であつた。事実仮名草子時代においてお伽草子の複刻はさかんにおこなわれており、場合によると、それと新作の仮名草子との区別さえ分らないというようなものが実にたくさんあつて、この当時のお伽草子熱を証明する。そのように、仮名草子が純粋小説の場において、いまだにお伽草子を脱け切れないというのは、云いかえれば新しい小説観がまだ未熟であつたこと、そして逆に云つて、お伽草子が近世町人の擡頭期に在つてもなお強い支持と歓迎を受け、小説とはそうしたものという固定観念の上に立つて、かなり惰性的流行的に製作されたことに因由する。今日の眼からするならば、すでに述べた説話集や、数義問答体小説や、記録文学や、名所記文学の方に、むしろ新しい小説の萠芽を感ずるのであるが、その当時はかならずしもそれを正統小説とは考えずに、いたずらに過去のものを追うことをもつて正統小説と考えたのであつた。

そういう訳で、この中世風物語は、仮名草子の中では一番大部を占めるものであり、書名を挙げるのみでも実に膨大なものになるのであるけれども、先ずその整理の意味で、ここに重要な問題点を採上げてみたい。それは、先にもちよつと触れたお伽草子の複刻と仮名草子の新作物との区別の問題である。慶長から延宝にかけて約八十年間、その間の刊記を持つ中世風物語はおびただしいのであるが、その一つ一つを見ると、かなりお伽草子の複刻が交つている。たとえば丹緑本の刊本で「火おけのさうし」という一冊があるが、これはまた寛文六年の刊記のある松会開板の「火おけのさうし」二冊の再版を持つ。その限りでは仮名草子としたいのであるが、市古貞次氏の「未刊中世小説解題」[注1]に拠ると、「ひおけ」とある奈良絵横本二冊があり、しかも内容に、京都・堺・鎌倉の火災を挙げて江戸・大阪を誌していない点に成立年代を考量し得るものがあるとすれば、これは江戸時代に出来たものではなくてかなりさかのぼることが出来、従つてお伽草子の一種であるとしなければならない。同様に、万治三年と寛文十一年のそれぞれの刊記を持つ「一本菊（ひともとぎく）」も、横山重氏の「室町時代物語集第三」の解説[注2]に拠れば、やはり奈良絵本数種があつて、お伽草子としなければならなくなる。こういう類を探つてゆくといくらでもあり、これらはたとえ刊本があつたにしても、どうしても仮名草子から抜かなければならないのである。こういう風に、仮名草子のあるものは抜き、あるものは入れるという操作をおこなうと、実はなかなか複雑な問題が出て来て、ある場合には収拾もつかなくなつてしまう。つまりお伽草子と仮名草子の区別は、結局刊本のほかに、奈良絵本乃至は写本があるかないかということになるのであるが、この発見は偶然を頼りにするより仕方がなく、たまたまそういう原本が発見されたものはいいとしても、発見されないものについては、何時までも両者のどちらかと

いう疑問が跡を引き、云つてみればお伽草子と仮名草子の作品の奪い合いも起りかねない。たとえば島津久基氏の「近古小説新纂」や横山重氏の「室町時代物語集」に飜刻されている「おもかげ物語」は、写本が無く万治三年の刊本しか残されていないものであるけれども、これは内容はいわゆる本地物であつて明らかにお伽草子あるいは室町時代物語に入れて然るべく、島津氏横山氏の考量に間違いはないのであるが、やはり刊本しかないとすれば仮名草子の新作ともすることが出来るのであつて、仮名草子に入れたい気もして来る。こういう調子でゆけば、問題はますます広がつて、市古貞次氏の「未刊中世小説解題」に載せられている「御茶物語」「小町物語」「不忍池物語（しのばずがいけ）」「酒茶論」「雪女物語」「ゆや物語」なども、内容はともかくもとしても実は仮名草子の新作ではなかつたかという疑問さえ出て来て、誠に困ることになるのである。

つまりこれを解決するためには、適当な所で標準を立て、たとえ刊本しか残されていないものであつても、お伽草子臭いものはどしどしお伽草子に入れ、仮名草子はその中でも明らかに新作と分るものだけを扱うという風にすれば、幾分かの解決にはなるであろう。これは極めて大胆な態度であるが、試みにそのようにして書名を挙げてみる。

御茶物語（寛永七）　富士の人穴草子（寛永九）　朝顔の露（寛永頃）　田村の草紙（寛永頃）　つるぎのまき（承応二）　すみぞめざくら（承応二）　弘法大師御本地（承応三）　賀茂の本地（承応頃）　祇園の御本地（承応頃）　もんがく（明暦四）　美人くらべ（万治二）　松風村雨（万治二）　雪女物語（万治三）　おもかげ物語（万治三）　安倍清明物語（寛文二）　楊貴妃物語（寛文三）　ほうまん長者（寛文五）　花の縁物語（寛文六）　小町歌あらそひ（寛文六）　堀江物語（寛文七）　青葉の笛の物語（寛文七）　愛宕地蔵の物語（寛文七）　しのばずが池物語（寛文八）　観学院物語（寛文九）　勝尾寺御本地（寛文一〇）　まんじゆのひめ（寛文一三）

右のほかに刊年不明のものとして、

酒茶論　保昌物語　小町物語　恋塚物語　若草物語　あきみち物語　魚太平記　諸虫太平記　ゆや物語　角田川物語　葛城物語

以上のものは、その内容からして全くお伽草子との区別のつかないものばかりで、たとえこれらがお伽草子の飜刻ではなく、新作のものであつたにしても、すべて室町時代小説の中に組入れてもおかしくはないのである。もしこれらが、ただ刊本として現存しているがゆえに、仮名草子として扱わねばならないというならば、これらはすべて室町時代小説の模倣物であり、室町時代を過ぎた江戸時代においてもなおこうしたものが喜ばれたという証拠を呈するに過ぎない。それゆえこれらを一々解説するのは、いたずらに煩を求めるようなもので、あまり意味がないと思われるのでここでは省きたい。しかしもちろん省くというのは、それらが決して重要でないということではなく、その総体においてこの期の小説観の典型を示している点に注意を喚起しつつ省くものである。こういう模倣あるいは惰性も立派な流行である。流行色を扱うこの論文において、この流行も決して除去することは出来ない。けれどもその流行の根源は新しいものとは云われない。そこに流行といつても、かつて流行したものがもう一度流行するという特殊な情況を考慮に入れなければならない。省くのはそれが仮名草子以前の流行であつたからである。あくまで便宜的な処置であることを断つ

て置く。

そこで次に、仮名草子の中で、あくまでお伽草子の追随でありながらも明らかに新作であることの分る作品を挙げれば、左のようになる。

恨の介　薄雪物語　あだ物語　うす雲恋物語　錦木
ねごと草　はつ時雨　是楽物語

非常に数が少くなつてしまうのであるが、それだけに右の作品には注目すべき重要な意味がある。今それを解説してみよう。

「恨の介」（一六〇九年頃）二冊は、文中に「慶長九年の末の夏上の十日のことなれば」の文句があるので、成立は慶長九年以後のことになるが、柳亭種彦の「好色本目録」の中に、種彦の友人栗原柳庵の説として、作中人物の年齢の推定から慶長十四年以後となると述べている。しかもこの作品は、十一行本あるいは十二行本の木活字本が発見されている以上、慶長に程遠くない元和あるいは寛永期に出版されたものであることに間違いはなく、右の年記及び内容から新作であることにも疑いはない。そしてこの作は異常な好評を博したらしく、整版のものもあらわれ、明暦二年版、寛文四年版、寛文七年版と版を重ねている。なぜこの作がか程までに好評を得たかということについては、いろいろと問題があろうと思われるが、とにかく筋立ては全く中世風な物語である。葛の恨の介という男が、慶長九年六月十日に清水寺に参詣すると、そこで遊山をしている女達を見かける。特にその中でも三味線を弾いている絶世の美人に心奪われ、それより恋わずらいに陥つたが、やがて清水観音の利生で後藤庄司の後家というのに逢い、その手引きで美人の部屋を訪れることが出来た。しかしそれも一夜のみで、その後は会うことが出来ず悶々の内に死ぬ。それを聞いた美人もまた後を追つて自害した。当時の人々これをあわれみ、同じ墓に葬つたという恋愛譚である。こういう筋立てならば、別に新奇な所はなく、評判の理由は考えられないのであるが、しかし文中あらゆる箇所に流行の事象を採入れ新時代の作品めかしている点は、少くも新しい作品として歓迎されたものと見える。たとえば、流行歌の挿入がそれであり、「とてもこもらば清水へ、花の都を見をろして」といつた歌舞妓踊歌の採入れや、「八こゑの鳥はいつわりをうたふ、まだ夜は夜中、しめておよれよの」といつた小唄の採入れは、確かに新しさを感じさせるし、美人の形容でも、「ものによくよくたとふれば、唐の楊貴妃摩耶夫人、虞子君李夫人星の宮」と古来の美人を挙げて、「これにはいかでまさるべき」と結ぶのは、お伽草子の定型を免れないのであるが、よく見れば、その美人の中には、当時さかんに読まれた舞の本やお伽草子の美人が列挙されていて大変新しい。そしてそればかりでなく、美人の出生が実は関白秀次に仕えていた木村常陸守の孤児であり、その出生に関して秀次の謀叛事件がながながと紹介されているのは、最近の割合に新しい事件であつただけに興味を引くものがあつたろうし、恨の介が死んで、そのあとを追うて姫も死に、世の人が二人の比翼の塚を築いたという一種の心中死も近世的である。さらにもう少し突きこんで、この話が何か当時に実際にあつたニュースを題材にし、それをかなり匂わしているということが事実であるとすれば、ますますこの作の流行性の基が想像されるのである。

とにかく全体的に中世風な物語であり、ほとんどお伽草子色を免れない作でありながら、以上のような新しさを持つているとすれば、これはその意義なかなか没却することが出来ない。つまりお伽草子の中から、漸く近世小説の芽生えがあつたということが出来るからである。そしてそれだけに後世に影響する所も大きく、西鶴の「好色一代男」の主人公世の介の名も、実はかなり恨の介の名を踏んでいるので

はないかとも考えられ、また事実仮名草子の中にも「ねごと草」「是楽物語」のような追随作を生んでいる。「蔦の葉やうらみのすけが下重ね」（正伯・俳諧沙金袋）「はらはらと恨の助をとりさがし」（風国・俳諧枯尾花）といった後世の発句または附句も見られる。

この作古活字本と整版本の間には、非常に内容の違いがあり、おそらく古活字本の方が原文と思われるが、整版本はそれに補筆して複雑な文章にしてしまっている。古活字本の方が古型を存し、すっきりしている。[註7] 作者は不明であるが、内容の衒学的な点から、かなり古典に通じた貴族の一人ではなかったかと考えられる。[註8]

「薄雪物語」（一六三二年）二冊は、整版の「寛永九年壬申十二月吉日　中野氏道也梓」とある丹緑本が現在見うる最も古いものであるけれども、横山重氏の示教に拠れば、慶長頃の古活字本が端本で存するという。[註9] とすれば、成立はもっとさかのぼることになり、場合によると「恨の介」よりも古いということになるかも知れない。事実高野辰之氏も、これを「恨の介」よりも古いとされた。[註10] しかし整版だけでも非常に多く、「好色本目録」に「此等多板ありてかぞへつくしがたし」とあるのは、まさに正しい指摘である。管見で挙げてみれば、無刊記であるが寛永九年版の霞刻の丹緑本、寛永十三年版、寛文四年版、寛文六年版（小本）、寛文九年版、延宝八年版、貞享三年版の教種がある。このような多板は、やはりこの作が異常な歓迎を受け、流行したことを意味する。

内容の筋立ては、種彦の指摘[註11]を俟つまでもなく、「恨の介」に似た所がある。園部衛門という男が深草に住んでいる所も、衛門が清水寺で薄雪を見染める所も、艶書をその下女に托す所も、そしてやつと恋がかなう所も、すべて「恨の介」と違わず、従つて中世風な恋物語の範囲を出でないのであるが、ただ全篇の大半が衛門と薄雪の往復書簡で構成されており、いわゆる手紙体小説である点は「恨の介」とは大分異なるのである。もちろん「恨の介」にも艶書が一つか二つは載せられているが、これ程全篇を艶書で構成するという思い付きはなされなかつた。それだけに「薄雪物語」は、中世小説の中でも「玉虫の草紙」や「ふくろふの草子」の艶書体を受け継いだもので、その点は「恨の介」をとび越しているのである。だからこの書が好評を受けるにつれて、「恨の介」が単なる恋愛小説として受け取られたのに対しこれはむしろ艶書の文範という形で受け取られ、たとえば「ちわぶみの手本にうす雪ものがたり」（風流色芝居）とか「薄雪恋の文づくしを手本にしてぬれ文を書ならひ」（咲分五人娘）という風に、ぬれ文の手本としての価値が高くなつてしまつた。だから事実その後の追随作が、たとえば「薄雲恋物語」（一六五九年）「詞花懸露集」（一六五九年）「錦木」（一六六一年）「薄雪いもとはつ時雨」（刊年不明）などにしても、艶書に中心を置き、そういう流れをさらに確立したばかりでなく、それはやがて元禄の浮世草子にも影響を及ぼして、「好色年八卦」「好色文伝授」「万の文反古」のような手紙体小説、また単なる文範として「好色錦木」「新薄雪物語」、「当流雲の梯」「薄紅葉」のような文例集を生み出して来たのであつた。

「薄雪物語」の往復書簡の中には、さまざまな故事や古歌が引かれ、かなり啓蒙的な意図の露出が感ぜられる。がお伽草子や舞の本の丸取りなどもあり、たとえば上巻の「西行物語」、下巻の「和泉式部」などの丸取りは特にひどい。巻末の高野詣でが「太平記」の丸取りであることもすぐ気が付かれる。どうも「恨の介」の作者ほど、古典の造詣は深くなかつたようである。しかしそれにしても手紙体小説の思い付きは、時宜を得たものであり、新小説への志向を示した所の功績は買つてよいと思う。

「あだ物語」（一六四〇年）二冊は、序文に平為春の署名があり、また上下巻の各巻頭にも「平為春作焉」とあるので、作者は三浦道寸

六世の孫の三浦為春であることが分る。為春は父正木頼忠が北条氏の質となつて小田原に居た時分に生れ、十四才で安房に帰つたが、慶長三年二十六才で徳川家康に仕え、姓の正木を改めて三浦にし、八年頼宣附きを命ぜられて常陸五千石、十五年に遠江浜名八千石を賜わつた。元和元年頼宣に従つて大坂の役に出陣、同五年頼宣紀州侯となるに及び、和歌山にゆき、寛永元年致仕、出家して循庵と号した。「あだ物語」は彼の和歌と仏学の知識の余に成るものであるが、この作は後水尾院の叡覧に供せられたという。承応元年七月二日和歌山にて八十才で歿した。

内容はお伽草子の異類物の模倣で、北山の照うそ姫に諸島が艶歌を贈るに始まり、照うそ姫はこれに返歌をする。その後姫は病にかかりふくろふ法師の加持を受けるが、法師もまた姫に迷い小僧のこうもりに文をことずける。鷹の一族もまた姫に恋歌を贈つて来たので、姫は仰天したが、四十雀の奇転で危機を脱れる。処が姫がみみずくに托したふくろふ法師への返歌が、たまたまみみずくの粗忽から鷹一族の手に入り、鷹は法師を脅迫したが、こうもりの弁舌でこれも危機を免れた。しかるに鷹はこの機に姫の宮仕えを強要するので、姫はまたまた失心し、ついに世をはかなんで自殺する。かくて諸鳥もはじめて迷いの夢がさめ、小僧のこうもりの説法を聴くに及んで得道し、皆々受戒するというに終る。このような内容で、典型的な中世風物語であるが、強いて云えば中味の仏教論・医論などは新しく、また武士の書いた小説という意味で興味をそそるものがあつたであろう。しかし特に開拓的なものであるとは云いがたい。

「ねごと草」（一六六二年）二冊は、やはり中世風の物語でありながら、名所記がは入つたり、俳句が詠まれたりして、大分新しくなる。三河吉田の宿に余助という男が居り、友達の金無（きんない）と花見に出かけるが、山の愛染明王の引合せで下女に会い、その美人は遠江白菅（しらすげ）の宿の松風という遊女であると教えられる。二人はそれより白菅を目ざして旅をする。この吉田と白菅との間に紀行文が名所記風になつており、当時流行の名所記文学の影響を受けたことは明らかである。白菅に着いて、松風に艶書をことずけるが、この艶書が今様歌になつているのは、また「恨の介」の模倣であろう。かくて一夜の逢引がかなうのであるが、その時目が覚め、すべてが一場の夢であつたことを悟る。「これぞせわにいふなる春の夜のあたゆめならんとかたられし」と結ぶ。

すべてが夢であるとするのは、作者自身がすでに中世風ロマンに気が引けていることを示し、それだけにこの作における中世小説的要素は後退していることが分るのだが、といつて新しい開拓的な小説を書く気力もなく、せいぜい名所記を採入れたり、俳句を挿入したりして新味をねらつたのであろう。この時期の混乱した小説観がうかがわれる。

「是楽（ぜらく）物語」（刊年不明）三冊は、上巻に「明暦元年の比かとよ」という年記があるので、それ以後の作であることは分るが、刊行年月がはつきりしない。私見の東洋文庫本は、挿絵が万治二年刊の浄瑠璃本「景清」と同一であるので、あるいはその頃の刊行かとも思われる。そうすれば、前記の「ねごと草」より早い刊行になるのであるが、内容は「ねごと草」より新しいものがある。筋立てはやはり中世物語風のロマンであるが、明暦元年の頃京都に山本友名という金持がいて、夢に女人を見て悶々とし、太皷持の是楽を連れて八月十一日有馬温泉へ湯治にゆくが、九月六日帰つて来る途中、夢の女と同じ女を見かける。そこでその女を妾にするが、女は友名の本妻の怒りをおそれて瀬田川に身を投げる。友名は悲嘆にくれて、百カ日の追善に一部八巻の経を読ませるというのが大まかな筋である。年月の明記があつたり、主人公が町人であつたりするのは、何か当時実際にあつた話を

仕組んだのかと思われるが、それだけに単に中世小説というよりは浮世草子に近い新しいものがあるのである。ただそれが完全に浮世草子になり切れなかつたのは、この当時の小説の新しさがはつきりとまだつかまれていず、当時の流行を採入れることによつて、新しさを装おうという消極的な態度そのものに原因があつた。たとえば、友名と是楽の有馬へ湯治にゆく途中が京都の名所記になつているのは、もちろん当時の名所記文学の流行を採入れようとしたものであり、また中巻全部を使つて、有馬での友名の教訓話を載せ、始皇帝・玄宗皇帝の湯治の話から、楊貴妃・陶朱公の話まで書いているのは、余計な脱線とはいうものの、そこに流行の教義問答体小説を採入りて新しさを装おうとしたものであろう。そういう処に、確かに作者の新しさへの傾倒を見ることが出来るのであるが、新しさはその程度であつて、それ以上に進めなかつた所に、この作の革新性の挫折を見る。やはり当時小説の革新は余程むずかしいものであつたのだろう。

だがそれにしても、この作は仮名草子の発展として十分に注目に値するものがあり、考慮されるべき多くのものを含んでいる。この作において、町人を主人公にした浮世草子の出現が、ぐつと近くなつた感がある。

以上、中世風物語の系統において、明らかに新作であり、また新しい意義を持つた作品を解説したが、こういう作品は数少かつたとはいえ、それぞれに問題を含んでいることは了解し得るであろう。圧倒的なお伽草子の模倣物の氾濫の中で、これらはとにかく限界を越えようとしている。そういう点が非常に注目を引くのであるが、ここに同じように新しい態度を持ちながら、逆に古典を近世風にもじつてゆこうとする一群の小説がある。これは、果して中世風物語と云つていいかどうか疑問であるけれども、古典から離れ切れずに、せいぜいそのもじりで満足するという伝統的態度は、やはり一種の古風な態度であつたとも云えるであろう。その意味で、一応この中世風物語の部に入れて置こうと思う。そういう擬物語の作品は、次のごとくである。

犬枕　　尤の草紙　　仁勢物語　　犬徒然

「犬枕」（一六〇六年頃）一冊は、小本の木活字版であるが、野間光辰氏の報告[註12]に拠れば、古写本が三本あり、その比較によつて写本が活版化されたことが分るという。写本は未見なので何とも云えないが、活字版は総紙数三十一丁で、内題に「犬枕并狂歌」とあり、二十七丁が「犬枕」、三丁が「狂哥」である。序跋及び刊記もないので、成立年次も詳かにしないが、のちの「尤の草紙」の序文に「よろこびながきとしのころかとよ、これかれあつまりて、かの清少納言がまくらさうしをまねびてかきたる物あり。その名を犬枕といへるなり」とあつて、慶長年間の成立であることは推測される。内容は、「枕草子」の類纂体をまねたもので、「うれしきもの」「かなしきもの」「したひ物」等、七十三段に分れている。また「狂哥」は「ひろき物さとりの心四方の空子もちがものにむさし野の原」以下十九首を収載するものである。

作者は、「当代記」に慶長十二年十二月十四日に死去した秦宗巴について「是犬枕双紙作者也」という指摘があるので、宗巴が中心人物であつたことが分る。宗巴の伝は「大日本史料」にくわしいが、豊臣秀次・徳川家康に仕えた医師で、また文学に通じた知識人であつた。上流社会に出入りしたお伽衆の一人と考えてよいであろう。

「尤之双紙」（一六三二年）二冊は、寛永九年六月の整版本が初版で、なお寛永十一年、慶安二年の再版本がある。序文に「右のままき（枕草子と犬枕）にかきもらしぬる、ことそぎてかたはらいたき事どもを、とりあつめ、此狂言となせる物ならし。しかるに今はたしきた

への、まくらといふ名をかたどらん事は、神慮もおそろし。さはありといへ共、おもかげのいささかかよふなるをとて、枕とよむもじの、一方を残して、尤のさうしと名付待りぬ」とあるので、その書名の由来を知ることが出来るが、同時にこの書が「尤枕」の先蹤を追うて、「枕草子」の類纂体をまねたものであることも分る。上巻四十段、下巻四十段の内容は、やはりそれぞれ題目をかかげてそれに類する事物を並べたものである。たとえば「ながき物のしなじな」といえば、堯舜の御代百七年、我が朝の神代八十三万六千八百余歳、人王の御代百五万歳の御代、勢田の橋、鎌倉建長寺の廊下、猿猴の手、象の鼻、上手のうつ基、下手の談義といつた風である。しかし、さすが近世風の風俗が並べられて、おもしろい段もある。

作者については、やはり野間光辰氏が、連歌師の齊藤徳元説を出されているが[註13]、全体に堂上的な匂いが強く、徳元を中心にして公卿の手が加わつていると見られる。

「仁勢物語」（刊年不明）二冊は、寛永頃の整版本と貞享三年の再版とがある。寛永整版には刊記がないので、刊行年月を明らかにしないが、内容にキリシタンの火刑の事や若衆歌舞伎の事が出て来るので、大体寛永年中の成立と考えてよいと思う。伊勢物語の内容を一段々々逐語的にもじつたもので、苦心の程がうかがわれる。一例を挙げてみよう。

をかし男ありけり。きりしたんの御法度ありて、むさし野へつれて行くほどに、とが人なれば、町奉行にからめられにけり。女も男もくさむらの中におきて火つけんとす。女わびて

むさし野はけふはなやきそ浅草やつまもこもれり我もこもれり

とよみけるを聞きて、夫婦ながらたすけて放ちけり（仁勢物語）

昔、男ありけり。人の女を盗みて、武蔵野へ率て行く程に、盗人なりければ、国守にからめられにけり。女をば叢の中におきて逃げにけり。道くる人、この野は盗人あなりとて、火つけむとす。女わびて

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

と詠みけるを聞きて、女をば取りて、ともに率ていにけり。（伊勢物語十二段）

右のごとく逐語的にもじつている訳であるが、そのもじり方は滑稽をねらつているのであるから、近世的と云えるかも知れない。

作者については、「好色本目録」以来烏丸光広説が有力である。しかし決定的ではない。

「犬徒然」（一六五三年）二冊は、巻末に「承応二年発巳正月吉日書記之開板者也　高田弥兵衛」とある整版であるが、これとは別に近衛応山公筆の写本があり、巻末に「元和五年四月十日書之」の年記、及び「此一巻衆道ノ大秘蔵也。可秘も猶口伝之」の断り書が附いている。とすれば、この成立は承応二年ではなく、もつと早く慶長元和の頃とすべきかも知れない。内容は徒然草に模して衆道の心得を随想的に書いたもので、まだ中世的な匂いがする。この作の前に、「若衆短歌」「犬短歌」といつた児教訓書のあつた事が、この作の本文に引用されているので分るが、これはそれらの作に触発されて生れたのである。そしてこの衆道書は、「心友記」（一六四三年）「催情記」（一六五七年）などの衆道物とともに、仮名草子の男色文献となるものであるが、ただそれが擬物語としてある所にその特色を認めなければならない。

以上、枕草子とか伊勢物語、あるいは徒然草を意識的にもじつた擬物語の系統は、そういう古典によりかかつた姿勢に因習的なものを感ずるのであるが、全体に慶長から寛永にかけての初期に流行している事実が注目され、従つて仮名草子が近世文芸として発足する一つの過渡的な状態として理解することが出来る。中世の理念がまだふかぶか

としているこの時期に、こういうバーレスクの発生は、やはりそれなりに新しいものとして十分把握される必要があるであろう。ハワード・ヒベット氏は、「パロデイやいろいろな種類のバーレスクは徳川時代のリアリズムの進歩を示している」[註14]と述べ、近世文学がさらにその後もこういうもじり文学の発展として生れたことを指摘したが、確かにそういう事も云えるのであつて、この態度はその後伊勢物語をもじつた「吉原伊勢物語」や、徒然草をもじつた「吉原失墜」などを通じて、俗源氏と云われた西鶴の「好色一代男」にも流れこんでいる。因習的とはいいながら、むしろこれらにおいては伝統にいどみかかろうとしている新しい態度の方が重視される。その意味で、これらはかならずしも中世風あるいは伝統的なものとのみは云い切れない範囲のものかも知れない。

註1　同書一七七頁。
註2　同書七〇一頁。
註3　和田萬吉氏「古活字本研究資料」に東京帝国大学図書館蔵として紹介されているが、大震災で焼けた。
註4　横山重氏蔵。本書は同氏の許可を得て拙著「仮名草子集上」（朝日新聞社古典全書）に翻刻紹介した。
註5　秀次事件は文禄四年（一五九五年）。同事件を扱つた仮名草子に既述の「聚楽物語」がある。
註6　松田修氏「うらみのすけをめぐつて」（国語国文昭和三〇年一二月）参照。実際のニュースというのは、慶長十四年の烏丸光広ら九人の公卿の乱倫事件である。
註7　現在飜刻されているものはすべて整版本であるが、これは増補はなはだしく、特に下巻はひどい。整版本をもつて「恨の介」を論ずるのは危険である。
註8　「日本文学大辞典」に烏丸光広説を採るが疑問である。
註9　古活字十行本の下巻。十二行本の上巻、二色の丹緑本上巻が残つている由。
註10　「江戸文学史上巻」一八二頁。
註11　是れもある男清水へ詣で、薄雪といふを見染め、遂に本意はとげたれどもかの薄雪身まかりければ、男は髪をおろし、れんしやう法師と名乗り、高野の山に入る事を記して、粗ぼ恨之助が物語に似たり。（好色本目錄）
註12　「仮名草子の作者に関する一考察」（国語と国文学昭和三一年八月）参照。
註13　同右。
註14　"Saikaku and Burlesque Fiction" (Harvard Journal of Asiatic Studies vol. 20 June, 1957)

七　遊女評判記の流行

遊女評判記は、もちろん遊女の評判であるから、遊里の発生及びその発達とともに盛行し始めたものである。遊女及び遊里の発生は、古くは平安朝頃にまでさかのぼることが出来るかも知れない。摂津淀川べりの江口とか神崎など、遊里として古来有名であるが、室津をはじめ港々にも遊女町があつたし、鎌倉時代には「曾我物語」に出てくる大磯などは遊里として有名であつた。しかし公娼の初まりは室町時代になつてからであつて、大永八年（一五二八年）京都に傾城局というものが出来てからであるという。近世においては、町人の享楽に応えて各都市に遊里が開設され、繁昌を極めた。その中でも特に、京都・大阪・江戸の遊廓は大規模であつて、遊女評判記とは関係が深い。

遊女評判記は、遊女を批評することによつて遊里の紹介を目的としたものだが、はじめは必ずしもそういう実利的な目的から発生したものではなかつた。たとえば寛永年間に成立したと思われる江戸元吉原の「四十二のみめあらそひ」、京都六条三筋町の「露殿物語」などを見ても、評判というよりは物語に重点が置かれており、寛永十九年の元吉原の「あづま物がたり」にしても、評判よりは見聞記に重点が置かれていた。評判記が急に実利的になつてくるのは、京都では島原の「桃源集」[註1]（明暦一）、大阪では新町の「まさり草」（明暦二）、江戸では新吉原の「讃嘲記」（寛文四）あたりからであつて、明暦以後

と考えていいようである。しかしこのように評判記が実利的なものになつてくると、文学的要素が少くなつて、どの程度それらを仮名草子として扱つてよいか判定に苦しむことが多くなる。たとえば「桃源集」といつたものを見ると、ただ島原の遊女五十三名の評判のみであつて、各評判のあとに漢詩だのくずし歌だのが附せられてあつても、それだけでは文学書とは云い得ないものである。これは遊女の紹介のみをすれば事足れりとする実用主義なのであつて、はじめから文学書を製作する意図がある訳ではない。そうなると、やはり小説を中心と考える仮名草子に、これら純粋の評判記はどうしても入れがたいということになる。

そこで現存する六十数種の遊女評判記から、そういう純粋な実用主義の評判記を除き、多少でも文学的な意図の交つたものを挙げてゆくと、左のごとくになる。

江戸
四十二のみめあらそひ　あづま物語　高屏風くだ物語
吉原かがみ　吉原用文章　吉原すずめ　吉原六方　吉原こまざらい　吉原伊勢物語　ぬれほとけ　吉原失墜　吉原恋の道引　伽羅包
京都
露殿物語　こそくり草　難波物語　寝物語　美夜古物語　空直なし　秘伝書　たきつけ草・もえくひ・けしずみ　色道大鏡　やりくり草　都風俗鑑　朱雀諸分鑑
大阪
新町をかし男　浪花鉦　古今若女郎衆序

先ず江戸から解説してゆこう。「四十二のみめあらそひ」（一六三三年頃）は、刊本ではないが、胡蝶装十六葉の小冊子が残されている。東明雅氏の解説[昨2]に拠れば、成立は寛永十二年頃ということになるが、寛永十二年といえば江戸の吉原はまだ堺町にあつた時分であつてそこの遊女四十二人が評判されている訳である。内容には菅原権大納言よしみちが長雨のつれづれに友達と遊女を左右に分けそれぞれ花にたとえて、勝負を判定したものということになつて、大体に礼賛的な調子で書かれている。

「あづま物がたり」（一六四二年）一冊は、「寛永十九年六月吉日はんや清兵衛開板」の刊記のある半紙型刊本である。関東のある男が江戸見物に来り元吉原に案内される。そこで遊女の評判を聞かされるということになつているが、その評判も大体礼賛的であり、後期の評判記とは大分異なる。しかし細見的要素も加わつてかなりくわしいものである。

「高屏風くだ物語」（一六五九年）二冊は、絵入りの鱗形屋出版の中本。書名の由来は、高屏風は六法肌の奴のことでつき合いにくいもの、そして「心にうつり行こしかたの事共、そこはかとなく書付れば、何事もつまる所はくだ成けり」（跋文）とある、ともに自卑の心から出たものである。吉田、ちとせ、かつ山、ときはなどの遊女評判もあるが、主となつているのは二代目高尾の伝で、前年の万治二年十二月五日に病死したいわゆる万治高尾が、流説のごとく殉死したのではなくて、やはり病死であつたことがこれによつて確認される。

「吉原かがみ」（一六六〇年）一冊は、中本で鱗形屋版。巻頭に細見図があり、次に二十八人の遊女が客との問答で語る諸分秘伝、さらに遊女批評の短歌及び各遊女の姿絵が載せてある。この書実は島原物の「寝物語」の剽窃であつて、遊女の名を変えただけのものであるが、較べれば「寝物語」の三十人が、これでは二十八人になつていること、「伽羅巻」の金太夫、「袖の露」の吉野、「腰切」の三笠が同名

になつていることが目につく。島原物あるいは新町物を、吉原物に変えて出した評判記は、これに限らず、たとえば「新町をかし男」を「吉原伊勢物語」としたり、「たきつけ草」を「伽羅包」としたりしたものがあつて、江戸が常に上方の模倣につとめていたことが実証されるのである。江戸の上方に対する文化的立ちおくれを示すものであろう。

「吉原用文章」（一名吉原くぜつ草）（一六六一年頃）は半紙本一冊。鱗形屋版。艶書集で、既述の「錦木」の影響下に生れたものであろう。

「吉原すずめ」（一六六七年）は小本二冊。江戸ますや板。諸分秘伝物であるというが未見。

「よし原六方」（一六六八年?）小本一冊で、十四名の遊女に歌舞伎の六方詞をあてはめたもの。たとえば「新町たかほ」には「是さ、その名もたかをのもみじ、我はしぐれにあらねども、ふるたびごとにこいのますこんだは」といつた調子である。

「吉原こまざらい」（一六七一年以前）は半紙本一冊の鱗形屋版。刊行年月を誌さないが、「松平大和守日記」の寛文十一年九月十八日の条にこの書の名が見えるので、それ以前の刊行である。この書やや変つた内容を持ち、遊女の評判ではなくて遊客の評判がしてある。つまりいろいろな種類の客をその職業に応じた言葉で批評したので、それらの言葉を集めたから「こまざらい」というのだと云つている。俳諧師・侍・商人・馬おひ・鍛治屋・医師・百姓等々、三十六人の階層が登場し、その職業らしい独白をするのであるが、一種の職人尽しである。俳句が一句ずつ附けられ、その下にやはり一名ずつの遊女名が記してある。

「吉原伊勢物語」（一六七三年頃）は、半紙本二冊であるが、前述のごとく大阪新町物の「新町をかし男」（寛文二）を吉原物に変改したもの。伊勢物語の文体をまねて吉原の話を載せたものである。

「ぬれほとけ」（一六七一年）大本三冊。これも変つた内容を持ち教訓物と評判記とが合体したようなものである。上巻、平金（ひやうきん）という男が大尽風のいでたちで山谷（さんや）へ出かけようとしている処へ、儒者がやつて来て止める。平金は滔々と色道を讃美し、学文は隠者のする仕事だといつて軽蔑する。儒者はあきれ果てて帰つてゆくが、平金は得々として出かける。ここから「道行」となつていて、飯田町、浅草、谷中などの地名をよみこんだ美文調になつている。平金は遊女よし野に会い、儒者をやりこめた話をする。処がよし野はその心得ちがいを説き神仏を敬し儒教の尊ぶべきを述べる。中巻はその続きで、平金とよし野との問答。よし野はさらに自分の境涯を述べ、「わが身生国はかずさのものにて、親は元来百姓にていとまずしきものなるゆへ、我が身を此さんやへうりすて侍べりし」そういう身であるが、からさきを太夫の手本と見ならひ、ついに太夫のよし野とよばれるに至つた。まして平金は上人であるから、心がけ次第で立派になれるではないかと説く。なお理学の必要をも、いろいろの例を引いて強調する。第十丁目の裏から遊女三十六人の姿絵と、その上に「かたばち、ろうさい」の小歌が誌してある。「かたばち、ろうさい」は、当時の吉原流行の小歌であつたのだろうが、「吉原はやり小唄総まくり」（延宝年間）を見ても、かたばちかはりぶし、雲井のろうさいなど十二曲が挙げてあるが、この「ぬれぼとけ」のものとは異なつている。第二十八丁の裏から以後、「やく」「ふる」「い気のよい」「気のとをりたる」等二十九語の解説。下巻は、やはり平金と吉野との問答であるが、はなはだ理屈くさく、儒仏道三教の教理の説明やら、「狂句」として道歌百首を挙げている。「平金どのはききたまい、至極の上の至極とて悪心をひるがへし、平兵衛と名をかへて、まことの道に入たまふこそめでたけれ」と終る。以上の荒筋で分るように、元来は教義問答体の小説

でありながら、その中に遊女評判記を採入れたもの。いろいろな流行に乗ろうとした作である。

「吉原しつつい」（一六七四年）は中本一冊で、序文中に「よしはらつれづれ草」の名が見える。徒然草の注釈書である青木宗胡の「鉄槌」をもじつて「失墜」としたものだが、徒然草の文体を模しながら吉原の堕落を嘆いたもので、擬物語の一つである。

「吉原恋の道引」（一六七八年）は大本一冊。各丁の三分の二は挿絵で、上部に本文がある。評判記というよりは、吉原の道案内のごときもので、「だちんの事」「浅草観音の事」「くわんをんうら門」「金龍山」「船みち」「どろ町」「大門口」「つぼね」「さんちや」「かうし」「あげや行」「あげや」の項目が見え、それぞれを説明したもの。挿絵は菱川師宣筆と思われるが、当時の風俗をしのばせるものがあつておもしろい。

「伽羅包」（一六八一年）は中本二冊のものであるが、下巻のみしか現存しない。諸分秘伝物であるが、島原物の「たきつけ草」を吉原物に改作したもので、創意の価値は認められない。

次に京都の遊女評判記に移る。京都の評判記は、天正十七年万里小路に出来たいわゆる柳町時代のものは無く、慶長七年六条に移つていわゆる三筋町のものが「露殿物語」であり、その余はすべて寛永十八年朱雀野に出来た島原に関するものばかりである。

「露殿物語」（一六三一年以前）は絵巻物の三巻で、寛永の初めごろ成立したかと思われる。中世風物語に属するものでありながら、その中に三筋町の遊女の評判が出てくるものである。物語の筋は、朝顔の露の介という十六才の少年が吉原の遊女と親しくなり駈落ちするが、女はすぐ捕えられて連れ戻される。しかし女はまた逃出して行方不明になる。露の介は女を探して京都へ上つてゆくが、この間の東海道の描写が道行風の文章になつている。京都に着いた露殿、京都見物をする内、六条三筋町の遊里を通りかかる。そこで吉野を見染める。ここで露殿は吉野をはじめ他の遊女の評判を聞かされることになるが、各遊女がいろいろの花や木にたとえられ、それぞれの容姿の説明の附随しているのが特徴的である。たとえば「吉野の前は月、秋の夕べは、人ごとにいと心ぼそければ、はし近く立いで、萩が枝にむすぶ露に、心をうつして、のこるあつさを忘れむとし、あるひは、松虫の音に、友をしのぶ折からなどに、遠山の木ずゑをかきわけて、月の澄みのぼる風情をみれば、うちしをれぬる心も、はればれとさはやかになれり」という風で、三十二人の遊女の評判がおこなわれる。なお露殿は吉野と親しくなつたが、その所へ前の吉原の女が訪ね来り、二人の女の愛にはさまつて苦悩する。そしてついに出家するというに終る。遊女評判記という程のものでないにしても、遊女の評判を試みたのは最初であり、見落すことの出来ない作である。文中の吉野が寛永八年八月退廓した六条の吉野であるなら、この作はそれ以前に成立したものと云える。

「こそくり草」（一六五三年）は、横本二冊であるが、下巻のみしか現存しない。一名「島原しつけかた」「閨情花伝書」ともいう。遊女の心得を書いたもので、「いやなやつふりやうの事」とか「空なきの事」等秘伝の公開である。遊女評判記の中には、最初の頃、このように遊女の読むべきものとして刊行されたものも多かつたのであろう。のちの「空直なし」「秘伝書」の走りである。

「難波物語」（一六五五年）は中本一冊。元禄五年の書籍目録には二冊とあるが、これは一冊を分冊したものであろうか。内容を見ると何か先行の書があつて、これはその批判をした形になつているが、先行の書は現存せず不明である。最初にある人とそれ者（粋人）との問答があり、それより大夫十三人、天神三十一人の評判がある。大体において露骨で辛辣な批評であるが、同年春の「桃源集」の影響を受け

たものであろう。但し、「桃源集」が単なる評判記であるのに対して、これは二人の問答体になつている所が小説的と云えば云えるのである。

「ね物がたり」（一六五六年）は半紙本一冊。内容は、評判記というよりは、諸分秘伝物に属する。三十人の遊女を登場させ、それぞれに手管の秘密を語らせるという形を採る。

雀子飼　　勝山　とし十七也

或人問云、何れのけいせいも、初対面には食くはぬ也。それにて夜食までは無食か。是如何。勝山の云、すずめの子がいと申事有。日くれがたにあげやの居間にてかみゆいなをす。其時あげやのかかか、又はやりてか、ちやわんにゆづけいだし、ぬるみと名付食するとみえたり。さればめしのほとびたるにて、そだつる故、すずめの子がいと申侍り。

右のごとき、遊女の告白によつて諸分をのべるという形式は、後に影響を及ぼし、「吉原鑑」「空直なし」「浪花鉦」など、すべてこの形式に拠つたのであつた。

「美夜古物語」（刊年不明）半紙本一冊。内容に「明暦ふたとせ、初卯月のする」とあるので、その頃の執筆であつたろう。物語の中の客と主人との問答で島原の有様や諸分を説くという形で、純粋の評判記ではない。近江の国の人が京見物に来て、名所を巡り、やがて帰ろうとした時、宿の主がこれを引留め、島原に案内しようという。客は自分が不粋であることを述べて辞退するが、主人はこの頃は「難波物語」「嶋原集」「寝物語」等の書が出で、また大阪には「まさり草」の刊行のあつたことを云つて、それらの書を示し、その内容を批判する。そして遊びとは、「慰みとばかり行かば、せくことも憎むこともあらじ」と説き、「多く行く者は、徳の内に損あり。多く行かざる者は、損の内に徳あり」と結論して、客を島原に連れてゆく。茶屋に腰かけて人々の遊里の諸分を語るのを聞いたり、またある揚屋に上つて風景を見たりして、最後に客が「せめて其名ばかりなりとも書留めて、国にての物語にもと、しるしける物ならし」とて、大夫十五人、天神四十人、鹿恋六十六人と、揚屋の名四十一軒を誌して終る。教訓的な一篇であるが、評判というよりは島原風俗の紹介に力を注ぎ、のちの「都風俗鑑」の先蹤となつたものである。

「空直なし」（一六六三年）中本二冊。大阪西沢太兵衛板であるが島原物である。下巻しか現存しないが、諸分秘伝系であり、「かこひ」「端傾城」「あげや」「遣手」「よこばんきる」「やき手」「とりん坊」などについて解説したものである。弥蔵と女郎の対話になつているのは、もちろん「寝物語」の影響であるだろう。

「秘伝書」（刊年不明）は半紙本一冊。諸分秘伝物であるが、客よりも遊女や揚屋主人への心得を説いたもの。遊女心得三十二条、くつわ心得三条で、そのうち二十九条がのちの「浪花鉦」に剽窃されている。作者は有名な八千代の抱主奥村三四郎であるという。（朱雀遠目鏡跡追巻下）

「たきつけ草・もえくゐ・けしずみ」（一六七七年）は、横本三冊で、一冊ごとに以上の三つの名がそれぞれ附してある。「たきつけ草」は、島原帰りの老人と若者の二人の対談を載せたもので、粋の論議。「もえくゐ」は、その「たきつけ草」の批判として著者とある若者との対談を誌している。「けしずみ」は、かつて遊女であつて今は尼となつているある女と著者との対談で、やはり諸分秘伝の話が中心である。ただ「けしずみ」の最後に、「犬枕」のまねをした類纂体のもの、たとえば「うれしきもの」「かなしきもの」等十四項が挙げられている。そしてこの「けしずみ」の尼の思い出話は、仮名草子の比丘尼物の影響があると思われ、これはまたやがて西鶴の「好色二代男」や「好色一代女」の老女の昔話という形に引継がれてゆくものであつ

た。

「色道大鏡」（一六七八年）は、刊本ではないが藤本箕山の自筆本十八冊が現存する。遊里大辞典とも称すべきもので、「名目鈔」「寛文格」「寛文式」「二十八品」「心中部」「甄器部」「音曲部」その他、全国の遊里の紹介や遊女伝が載せられている。寛文頃の遊里の全盛がしのばれるものであり、遊里の情況を知るに恰好なものと云える。

「やりくり草」（一六七九年）は半紙本二冊。正しくは「島原評判やりくり草」。但し下巻のみしか現存しない。諸分秘伝物である。

「都風俗鑑」（一六八一年）は半紙本四冊。題簽は「都風俗鑑」であるが、内題は「都色欲大全」とあり、柱刻には「笑大全」ともある。意識的にそれぞれ書名を変えたものか。内容は、評判記というよりは京都の好色風景を写したものであつて、島原については第一巻で触れているのみである。すなわち巻一は、「都遊興ぞめきのしなじな」で先ず京都の人々が上も下も色欲におぼれている様を述べ、次に「大臣の風俗の事」「大臣嶋原に来ての諸分」「月なるかひての事」「ぞめき者となりそむる事」「やす傾城ぐるひの事」「やぼ介はしのぞきの事」「北むきぐるひの事」などで遊里の風景を描く。しかし巻二は、「都女の風俗」「物師こしもとの風俗」「中会はしたの風俗」「女をしたてる手入」「商人の女房の事」の項で、一般町人の好色風景を扱つているのである。巻三は、もつぱら歌舞伎役者をめぐる風俗の叙述で、「四条河原の評判」「女道に立入者野良をそしる事」「僧俗野良にうちこむ事」「女小娘并若後家若比丘尼野良に心をうかす事」の項がある。巻四は、「風呂屋女の事」「茶屋女の風俗」「京よりしもく丁がよひの事」「比丘尼の事」の項目で、それぞれの好色風景を描いている。以上のように、島原のみでなく一般の好色を扱つた処にこの作の特徴があるが、このような題材の拡張はやがてこれらが小説化される機運を暗示しているものであろう。事実西鶴は「好色一代女」において、あらゆる階層の娼婦を描いたが、この「都風俗鑑」にヒントを得たと思われる節がある。浮世草子発生の契機として重要な作品である。

「朱雀諸分鑑」（一六八一年）は半紙本二冊。題簽に「嶋原もん日」の角書がある。上巻は十一人の遊女のそれぞれの諸分についての談話、下巻は一般的な島原論である。

以上で京都を終り、次に大阪に移る。大阪は寛永八年に出来た新町が背景であるが、不思議に評判記が少い。この理由は不明であるけれども、大阪の町人にとつて遠隔の吉原や島原こそ不案内で関心があつたにしても、地元の新町は何も評判記に頼らなくても事情は知悉していたのだとも考えられる。純粋な評判記は「まさりぐさ」であるが、これは抜くとして、先ず「新町をかし男」（一六六二年）は、半紙本二冊で、伊勢物語の文体をまねた戯文である。和歌も一々もじつている。これが吉原物に変改されて、「吉原伊勢物語」になつたことは前述した。

「なには鉦」（一六七八年以前）は中本六冊。序文及び後序に延宝八年の年記が見えるが、既述の「色道大鏡」凡例に「難波鉦」の名が見え、また延宝六年正月に歿した夕霧の名が文中に見えるので、延宝六年までには成立していたものらしい。内容は「寝物語」「秘伝書」から盗用したものもかなり多いのであるが、新しくつけ加えたものもある。客と遊女との問答で諸分を説くというものだが、太夫二十六人天神七十四人を登場させた膨大さは今までにない事であつて、量的に従来のものを圧倒しているばかりでなく、質的にも写実的な小説の要素が増加している点に注意せられる。たとえば第六巻の「身の代」の高橋のごときは、まさに一篇の小説と考えてもよいくらいである。高橋は西鶴の「好色一代男」にも出て来る遊女であるが、それとこれを対比してみてもおもしろい。とにかく西鶴の前奏曲ともいうべき価値

をもつている重要な書である。この書元祿七年「好色罌粟鹿子」と改題して再版、また「諸分店風」と題して三版された。

「古今若女郎衆序」（一六八一年）は半紙本一冊。書名は「古今和歌集序」のもじりである。古今集の仮名序の文体をまねて、新町の遊女の評判をしたもの。万太夫・左門・お琴・金吾・吉川・和泉・今川・妻木などの遊女名が見える。これらも西鶴の好色物と関係がある。

さて江戸・京都・大阪によつて評判記は独占された形であるが、ここにただ一つ長崎の丸山を扱つた「長崎土産」（一六八一年）がある。半紙本五冊で、筆者は不明であるが、「色道大鏡」「まさりぐさ」の作者藤本箕山らしく思われる。巻一は、筆者が長崎に下り、長崎を見物している内に、稲荷明神で老尼二人に会う。それより筆者と老尼との問答になるが、筆者の長崎の遊里に関する質問から、長崎の説明や一般の遊里論が展開される。この仕組みは「けしずみ」の形式を踏襲している。巻二もその続きで、問答はさらに諸分の話になり、いろいろの口伝が説かれている。巻三は長崎遊女の評判で、「長崎丸山太輔日本行十人女郎合」とあつて、左方に金山はじめ五人、右方に出羽以下五人の評判があり、最後に「右日本行十人五番の女郎合は、遊女のほまれ轡の面目、且は異国の聞にも成べし」とある。巻四には唐人行の遊女二十二人の評判。巻五はやはり先の筆者と老尼との問答で、長崎遊里の様子が説かれ、特に唐人の遊びや遊女の風俗が説明されている。最後に「ものは附け」の形式で、「をそきもの」「はやきもの」等十八条の品々が挙げられて終る。「追加」は細見、「凡三百三十五人、内太夫六十九人」とある。長崎の評判記は珍しいが、唐人相手の港だけに特色があり、それだけに興味を引いたものであつたのだろう。西鶴の「好色一代男」でも、巻八の第四章は全部長崎の描写であり、「好色二代男」巻五第四章にも長崎の金山の話が出ている。やはりこの頃の町人の長崎への関心の程度を知ることが出来る。

遊女評判記の中の、純粋の評判記を除いた多少でも小説的乃至文学的と思われる評判記について、右に解説してみたが、結論的に云えば実にいろとりどりであり、物語的なものから諸分物、見聞記風のものと、その形式は定まつていない。多くは仮名草子の他のジャンルからの影響が強く見られ、ただそれらに共通するものと云えば、第一に遊里または遊女を扱つていること、第二に遊里案内といつた功利性のあること、第三にそれだけに事実を伝えようとする写実性のあることなどの特徴を挙げることが出来よう。結局これらは、近世町人の享楽から生れた新しい文学ジャンルであるけれども、それらが本格的な小説に昇華するまでにはまだ何か欠けたものがあつて、やはり井原西鶴の出現を俟たなければならなかつたというところに、この種のものの限界があり、可能性のみにとどまつたという訳である。とはいうものの、とにかく新しい近世初期の流行現象であつたことは言うを要しない。

ところで、遊女評判記ではないが、女色に対する男色の評判記というものはなかつたであろうか。無いことは無い。いわゆる野郎評判記といわれるもので、歌舞伎の発達に附随して出現したものである。この種の評判記は、明暦二年（一六五六年）の「役者の噂」を最初とするというが、その後「野郎虫」（万治三）「剣野老」（延宝二）以下、天和年間に至るまで三十種ばかり出ている。そしてそれと同時に、衆道の心得といつた男色物の草子も出で、これらが数種ある。たとえば「心友記」（寛永二〇）「田夫物語」（寛永年間）「催情記」（明暦三）「よだれかけ」（寛文五）「若衆伽羅枕」（延宝六）などで、この中で「心友記」（一名衆道物語）「催情記」「若衆伽羅枕」は若衆の心得を説いたものであるが、「田夫物語」「よだれかけ」は、男女色の優劣論を載せ特色がある。これも女色男色の流行に釣られ、それに教義問答体の形式を応用して、このようなものを作したのであろ

う。しかし何といつても、この種のものが遊女評判記ほどの量を見せなかつたのは、やはりこの世界が特殊のものであつたからである。

註1 「島原集（トウゲンシュウ）」のもじりであろう。
註2 「露殿物語・四十二のみめあらそひ・あづま物がたり」（古典文庫）解説。
註3 守随憲治氏「役者評判記年表」（歌舞伎序説）参照。

八　随筆文学の流行

仮名草子時代はまた随筆文学の大いに興つた時期でもあつた。しかしこれらの随筆は、近世中後期の単なる考証の余に出でたものや手なぐさみのものとは異つて、あくまで啓蒙的あるいは教訓的な意図をもつて書かれたところに、大きな特色があつた。すなわち近世発足の時期に当つて新しい倫理が要求されたこと、また一般的に知的要求が高まつたこと、本格的な小説がまだ確立されていず、従つてそれに替るものとして新しいものならば何でも読まれたということ、そういう今までのすべての流行態の基底に存する共通的な要素がここにも反映して、随筆文学を起さしめ、社会啓蒙の役割を果したのであつた。もちろん随筆であるから、小説とは等し並みに扱うことは出来ないといつても、この期の随筆はいわば文学以前の文学として、やはり重要視すべきものを含んでいると思う。殊に徒然草を摸して作られた「可笑記」（寛永一九）の成功は、大いに随筆文学興隆のきつかけをつくり、これに追随する多くの作品を生んだ。今その作品を挙げてみると左のごとくである。

目覚し草　可笑記　鸚草　悔草　いな物　他我身の上
身の鏡　可笑評記判　為愚痴物語　理非鑑　小扈

「目覚し草」（一六二五年）は大本二冊で、刊行は慶安二年であるが、跋言の末に「寛永第二季春日　烏丸大納言光広」とあるので、寛永二年の成立とする。作者烏丸光広は[註1]、従一位准大臣光宣の子として生れ、幼にして聰明、和歌を細川幽斎に学び、書もまた良くした。一時譴責停官の事もあつたがゆるされ、参議左大弁に復任、元和二年権大納言、六年正二位に進み、寛永十五年七月十三日六十才で歿した。その一生の生活態度、諸書の伝える所に拠れば、誠に磊落寛闊、典型的な近世人を思わせるものがあつた。それゆえ、「竹斎」「仁勢物語」「尤の草子」などの作者に擬せられているが、疑問はある。しかしとにかく最も話の分る堂上作家であつた。この「目覚し草」は、彼の名の明記されたものの一つであるが、彼の文明批評を見る上に極めて有力な資料である。作は、「草のいほりのつれづれなるに」一友人が来つたので、それにさまざまの話を語るという筋で、僧侶のこと、武士のこと、儒者のこと、手習いのこと、和歌のこと、音楽のこと、医道のこと、占道のこと、宮仕えする人の心得、主君たる者の心得、そのほか風流事やなぐさみ事に話が及び、一々それを批判したものである。全体的に啓蒙教訓的な口調が充満し、また近世人光広の世相への関心がよくあらわれている。

「可笑記」（一六三六年）五冊は、如儡子（じょらいし）の作であるが、この人の本名についてはいろいろの異説がある[註2]。全部二百七十九段の随筆であるが、各段書出しが「昔さる人の言へるは」とあるのは、一種の自己韜晦であろう。あるいは儒道、あるいは仏道、あるいは侍道、あるいは主君の道、そのほか一般人の日常の心得、興味深い逸話について述べているが、強い教訓啓蒙性を含んだもので、時局批判の言葉も多い。それゆえ、この書は非常に歓迎され、後世への影響も大きいが、再版もされている。直接の影響は、「可笑記評判」「可笑記跡追[註3]」の後続であるが、西鶴の「新可笑記」も書名のみであるが影響作の一つといつ

てよいだろう。「可笑記」の成立は、巻末の「寛永十三孟陽中澣」の年記によつて寛永十三年とするが、初版は寛永十九年、再版は半紙本で万治二年「絵入風流可笑記」と題されて刊行された。

「ひそめ草」(一六四五年)三冊は、序文に「越女心を病て眉を顰むれば、醜き人美しとして、痛ざる心を捧へけるといふ遺諺を思ひ、此草紙に号(なづ)け題す」とあるより、書名としたもの。内容は「可笑記」と同様に一段ごとに書分けているが、各段冒頭に「人のいへるをきけば」とあるのは、やはり「可笑記」の踏襲である。たとえ話もあり、たとえば蠅と蟻の問答のごときは「伊曾保(いそほ)物語」の影響であろう。儒教道徳を説いたもの、賀茂祭のこと、人麻呂のこと、ふくだうの事等について書いている。跋言に「津の国難波のあしもとに家居して」とあるので、作者は大阪の人らしい。

「悔草(くやみぐさ)」(一六四七年)三冊は、上巻「親の子をいつくしみ思ふ事」以下四十一段、中巻「子のおほきをうたてしと云事」以下三十七段、下巻「まづしければ心のひがむ事」以下三十七段の随筆で、儒教的仏教的色彩が強い。作者については「可笑記評判」に、「中比なにの小左衛門とかやいひしもの悔草三巻をつくりて」とあり、また「浮世物語」にも「井上小左衛門何がしが、くやみぐさをつくりて」とあるので、井上小左衛門ということは分るが、伝記不明である。正保四年初版、慶安二年再版、延宝八年「新板自己問答」と改題して三版。世におこなわれたことがこれでわかる。

「いな物」(一六五六年)は、中本二冊。内題は上巻が「露霜の夕」下巻が「いな物」となつている。上巻八段、下巻九段の随筆であるが、各段最後のことばが「いな物じや」となつており、これは序文によると「いな物じや。心はわがままなれど、ままにならぬはいな物じや」という当時の小歌から採つたものだという。身の持ちよう、迷信の不用、道心者の心得などを誌したもの。

「他我(たが)身の上」(一六五七年)六冊は、京都の俳人山岡元隣の作で、儒仏道のことや日常の心得について記し、時々説話を交えている。俳論なども見えるが、第六巻の最後の段のごときは、著者がかつて北村季吟の門下であつた証ともいうべき美しい擬古文が載せられている。元隣は伊勢山田の商家の生れであつたが、家業を継ぐことが出来ず、京都に出て医を業とした。国文学や俳論の著書多く、また「小さかづき」「百物語評判」の筆者でもある。寛文十二年六月二十七日、四十二才にて歿した。この書明暦三年が初版で、明暦六年再版。

「身のかがみ」(一六五九年)三冊は、上巻十三段、中巻十二段、下巻十三段の随筆であるが、大体が教訓的口調をもつて処世の心得を説いたもので、たとえば使者に口上のうまい人間を採るのは良くないとか(上巻四段)、当世のはやりの若党風は感心しないとか(上巻八段)、連歌に凝るのは博奕遊女狂いよりはましであるが、大きな費えであるとか(下巻六段)、そういう調子の風俗批判が多い。万治二年初版。寛文八年再版。

「可笑記評判」(一六六〇年)十冊は、跋言に「瓢水子筆之」とあるので、浅井了意の作と考えられるが、了意が「可笑記」に感激して一段々々引用しつつ「評曰」として論評を加えたもの。論評の中には多少挙げ足取りの感のあるものもあるが、是々非々主義の忠実な批判である。まず冒頭に「可笑記」の書名について、「かかる心ざしある書記の名に卑下の字をくはふるは、これその実義に徹せざる故なるべし」とその卑下を攻撃し、また「可笑記」第一段に永禄二年「けぶりのもえいづる昼あらはれたり」とあるのを「記録に見えず」と批判し、「侍の家々次第に衰へはてて、累代の家法を取りうしなひ、仁義礼をわきまへず」に対しては、「天下の侍みなかくのごとしといふべからず」と述べ、「賤き下子(げす)共をとりたて、家老出頭と用ひあがめ」に対しては、「これ大なる書あやまり也」「いやしきよりとりあがりて家

老出頭になるもの、人なみの人にはあらざる事目の前にみえたり」と反対している。大体こういう調子の批判であるが、全体からいえば、常に現状主義あるいは穏健な立場からする批判が多く、「可笑記」の激烈な口調をたしなめている恰好である。近世初期の二大啓蒙家の態度が比較されておもしろい。

「為愚痴物語」（一六六二年）八冊は、内題に「いくちものかたり」とある。序文に越後の曾我休自の作とあるが、伝記不明。ただし書中に、独身であったことや、朝鮮に行ったことが告白されている。神儒仏の教訓を語りつつ、また故事見聞を書き誌したもので、全巻百四十二段。書名のように啓蒙を意図した随筆である。清州城の野間藤六の話だとか、一休和尚の話、大福長者の教え等、雑多なものが含まれている。

「理非鑑」（一六六四年）二冊は、巻末に「生所日州之住無名漂白野人記之」とあるが、松田修氏の考証によつて今治藩の家老江島為信の作であることが決定された。上巻、「天の沙汰の事」以下十段、おおむね儒教的な立場からの批判が多い。たとえば「天の沙汰の事」は世間に口才佞人のはびこりたるは天にも依怙ありやの問答から、天に依怙なし但し変ありといつた儒教的な結論を下す。「天王寺花見物の事」では、友達とうち連れて天王寺へ花見にゆくと、ある寺で説法があつた。その僧が大学の序を細かに説いているのを見て、僧にて儒教をなまじいに説くのは興の尽くるものだとそしつている。「廻国巡礼の事」では、有馬山昆陽野の間に中山の観音があるが、そこへ常陸国から参る巡礼者を見て、世に仏法なかりせば人は迷はじものを、己のいとなみを忘れてかく遠国から参詣するものがある。物有本末、事有始終、知所先後則近道と感じている。「侍町人の事」は、世間の義理に侍町人の区別なき事を説き、「愚母いさめの事」では、母の教訓の深きを感じ、また作者が次男にて他家へ養子にやられた身上話が出ている。「軍法者の事」は、軍法者の無用なるを説き、「秘事なき事」は古今伝授を否定している。下巻、「妻離別の事」以下十一段。「妻離別の事」は、妻の無作法をとがめてある男離別せんとしたのを中老の人が孟子の例を引いて止める話、「藤見口論の事」は、藤見にて足を踏まれた武士を諫む。「武勇の事」では、武勇も義理なくしては大勇と言いがたしと述べ、「後悔の事」では、四才の頃母のいさめで石亀を放した事が述べてある。「大学集注の事」では、源三位頼政自筆の朱子集注の大学を持つている者をあざけつている。

「小庖」（一六七二年）五冊は、「他我身の上」の山岡元隣の作であること、「百物語評判」の自記で明らかである。「他我身の上」に引続いて執筆されたものであろうが、この方は内容もぐつとくだけ、興味ある説話を盛つている。教訓的な色彩が強いが、元享の飢饉の事（巻二第三）、囲碁双六のはじめ（巻四第八）、酒に善悪の徳ある事（巻五第三）、連歌の評判（巻五第四）といつた雑談も少くない。この書延宝四年巻二巻四のみを四冊とし、「雨夜の友」と改題再版。

以上随筆の主要なものを解説したが、もしこれに「儒仏物語」（万治三）「神道物語」（寛文一〇）「はなむけ草」（刊年不明）のような教義解説書や、「世諺問答」（寛文三）「世話品草」（寛文四）「枯杭集」（寛文八）「由来物語」（寛文一〇）のような物の由来を述べた実用書までを、随筆文学の中に入れるとすれば、この種のものは果てしがないのであつて、大体上述のものにとどめたいと思う。しかしとにかくこのような随筆が発生し、流行したということは、一つの時勢相を示し、この期の教訓啓蒙性をますます傍証するものになるであろう。注目すべき現象である。

註1　深沢正憲氏「鳥丸光広伝」（近世国文学第一輯）

註2　水谷不倒氏は「列伝体小説史」で湯村式部説を採られたが、森銑三氏は「典籍叢話」の「可笑記の著者如儡子は何人か」の論考で斎藤意伝説を採

られた。

註3　天明三年「可笑記善悪物語」（半紙本二冊）と改題再版。

註4　「日州漂泊野人の生涯」（国語国文昭和二七年七月）

九　結　論

この論文の冒頭[註1]に述べたように、仮名草子の諸流行現象について今まで考究して来た所以は、その考究によつて少くも雑多な仮名草子の一応の分類が出来ると確信したこと、また分類によつて各作品の系譜が明瞭になり、それがどう次の浮世草子に接続するかが分ると思つたこと、そしてまた分類によつてこの時期の傾向を知り新文学発生の問題が解明出来ると考えたことであつて、そういう意味から多くの作品に触れながらその系統を作り上げてみたのであつた。とにかく以上、一通りの流行現象の諸相を挙げたのであるから、これからそういう問題について最後に結論的に述べてみたいと思う。

先ず以上の流行現象の中で、ともかく中世からの連続と考えられるものは、第六の中世風物語であつて、これは小説という観点からすれば最も本格的な正統な小説であり、これが近世初期においても相変らず流行したということは、この時期の小説観がまだ中世的なものを脱皮していないということにもなり、その点のみについて考えれば、仮名草子はまだ中世の伝統の中に在つて本当の近世文学を樹立していないとも云うことが出来るであろう。つまり小説という文学の中でも最も正統な文学が、まだ中世を脱していないのである。もちろんその中にあつて、たとえば「恨の介」とか「是楽物語」「ねごと草」のような多少くずれた小説があつたにしても、これらは全体的にまだ室町時代小説風であつて、本当の意味での近世小説とは云い得ないようである。やはり本当の意味での近世小説と云えば、「好色一代男」（一六八二年）を発表した井原西鶴の小説から始まるのであつて、この小説には多少源氏物語や伊勢物語の影響が見られたにしても、もはや中世風物語と断定すべきものは何物もなく、これは見事な近世の本格小説であつた。とすれば、仮名草子時代は全体として古風な小説に満足していたということが出来、その限りではそこには近世の革命的な文学観はまだ存していなかつたと断定することも出来るのである。

しかし一方、目を当時の社会情勢に転ずれば、そこには驚くべき大きな変化が興りつつあつた。先ず政治的に云えば、室町時代の絶間ない戦乱は、少くとも大坂の陣（一六一五年）をもつて終息し、世は久しぶりに平和を歌いつつある。徳川家康によつて確立された幕藩体制は、諸国諸大名にとつては心ならぬ新体制であり、またそれによつておびただしく製造された浪人にとつては、不平不満の新時代であつたかも知れないけれども、一般平民にとつてはとにかくありがたい御代であつて、おのずから太平の御代を礼賛したい気持に駆られたのも当然であつた。「清水物語」に「御じひの御心ふかく、ありがたきためしとこそ、野のすゑ山のおくまでも承りて候へ」と述べたのは、かならずしも迎合の気持であつたとは考えられないし、「見ぬ京物語」で「されば当今の天下しろしめす、あまねきいつくしみの御めぐみ、四の海の外をうるほし、ひろき徳の御ひかり、筑波根のみねをてらさせ給ふ。これによりて匹夫もその所を得、鰥孤もうへとぼしからず、農工をのをのはらを皷して、ことぶきをさざれ石のいわほとなれるあしたをねがひ、士武弓をゆみぶくろにして、みことのりを二葉の松の林となれる夕をまつ。王法仏法午角におこなはれて、理世安民のいさおしなんいま此時にさかんなりと見えたり」とあるのも、単なる文辞の上の綾とは考えられない。庶民ひとしく平和の到来を喜んだのであつた。

平和の到来は、秀吉・家康による貨幣制度の確立とともに、町人の活躍を便にした。町人の活躍はすでに中世に始まつていたけれども、平和の到来はそれを促進し、特に大阪に集中した町人の擡頭は目ざましかつた。その最盛期は明暦の江戸大火以後で、特に大阪と江戸との間に菱垣廻船や樽前船の通航するようになつた寛文延宝の頃（一六六一年――一六八〇年）であるという。しかしこれらは新興町人であるが、明暦以前にも京都や堺には富豪がいたし、この旧富豪は少くも鎖国（一六三六年）前には外国貿易で産を成していたのであるから、京都・堺は大阪とともに元来町人の都であつた。つまり仮名草子の発生した京都は、商機活潑な上方を背後に控えて、まさに町人文化の最初の中心地であつたということも出来るのである。

仮名草子は印刷文化であつた。慶長勅版以来、家康の奨励もあつたけれども、民間には印刷への熱意が勃然と興り、有名な嵯峨本[註2]ばかりでなく一般にも古典の複刻や新作の出版が次々と計画され、それはやがて商業主義と結びついて一種の出版ジャーナリズムの現象をさえ起した。寛永期の出版者は優に百名を越える。そうした出版元から本が次々に出された。仮名草子もまた、そういう出版元の商品であつた。文学が商品化されたのは、全く近世に入つてからのことである。文学が商品化されるというのは、その購買者が予想されることであり、その購買者は少くも貨幣を有している者なのであるから、文学の性質もまたそういう購買者の性質に規制されるということも有り得る。つまりこの当時について云えば、金を持つている商人が仮名草子の最大の顧客であり、商人が最大の顧客であるがゆえに、仮名草子はまた商人の性格に規制されたということも出来る。実際上述の仮名草子の流行色を眺めていれば、それは単なる新時代の流行色というのではなくて、そのまま商人の性格をあらわしていると断言してもいいものが多い。流行というものも、実は出版ジャーナリズムから生れた購買者の性格の表現であつたという大胆な断定をしても、それはかなりの程度で真実であつた。

しかし、とにかく平和の到来と、商人の擡頭と、出版ジャーナリズムとは、仮名草子を支える三つの背景であつた。そしてこの背景は、まさに新時代を象徴するがゆえに、かなり性急なものがあり、文学の成熟などということを乗り超えて、とにかく文学に過大な要求をすることになつた。文学はその要求の前には、決して観照的な、あるいは静的なものでは有り得ずに、もつぱら実践に奉仕する功利的なものに変改された。過去の観照的な文学遺産はそのままにして置くとしても、現在はとにかく「役に立つ」ものでなければならなかつたのである。仮名草子の持つ功利性という独自な性格は、こうして前面に押し出された。

説話集の流行は、はなしにうち興じる民衆の性格を丸出しにしたものであつた。はなしはすでに中世の鎌倉時代からもてはやされた。「宇治拾遺物語」「十訓抄」「古今著聞集」「沙石集」「宝物集」「今物語」「唐物語」「古事談」「撰集抄」「雑談集」「発心集」等々、おびただしい説話集が中世には作製せられていた。これらの発生には、その背後にやはり民衆の擡頭を感じさせるものであるが、近世の説話集はもちろんこの継承ではありながら、そこにさらに広く、さらに深く、はなしを求めている民衆の姿を感じさせる。しかも中世の説話集のほとんどが仏教的であるのに対して、近世の説話集は儒教的である点が特異である。もちろん「因果物語」や「戒殺物語」のような例外もある。しかし仮名草子の説話集のほとんどが儒教的であるというのは、もちろん徳川幕府の文治政策の大本であつた儒教奨励の反映であることは云うまでもなく、しかも同時にそれは民衆にとつて目新しい説話なのであつた。説話集の作者は、分る範囲で云えば、浅井了意のような武士または儒者が多く、彼らはあくまで教訓的な態度で説話を編集

したのであつたが、民衆から云えばめずらしいおもしろいはなしで事足りた。特にイソップ物語が歓迎されたのには、内容の教訓的要素に拘わらず、むしろめずらしい話の集として読まれた傾向は否めず、教訓など実はどうでもよいものであつたかも知れない。その証拠に、説話集としては、むしろ滑稽な、あるいは怪奇なはなしが、多く求められた。そしてこれらの方が後世ますます栄え、教訓的説話集はほとんど仮名草子で絶えてしまう。井原西鶴の小説もまた、この説話集を継承したのであつて、それは誠に民衆の動向に応えたものであつたと云つてよいのであるが、その継承の仕方は、その教訓性を受け継いだのでなく、ただはなしの民衆性あるいは新奇性を受け継いだのであつた。従つて説話集流行の根本は、云われるような教訓性にあるのではなくて、むしろ民衆の貪欲な好奇にあつたと考えられる。ただこの説話集の中で、女性教訓書のあらわれたのは、読者に女性を予想した出版ジャーナリズムの思惑であつたけれども、たとえば、「名女情比（なさけくらべ）」のように遊女を扱つたものが、どれだけ女性に教訓的効果を挙げ得たか疑問の域を出でず、この一作などはまさに教訓とはなしの矛盾を露呈したものであつて、教訓が次第にはなしに圧倒される一つの見本であつたと指摘出来よう。説話集は、このように中世以来の民衆の好奇心に裏付けられながら、近世に流れこんだのであつて、やはり総体として扱うべく、ここでは特に教訓的であるとか、娯楽的であるからといつて、別々の系譜を樹てるべきではないと思う。

だが、それとは異なつて、特に知的要求としての啓発を求められた流行作品には、次の教義問答体小説があつた。これは、単に教訓を求めるというなまやさしいものではなく、むしろ儒教や仏教の教義そのものを知ろうとする当時の民衆の性急さに支えられたものであつた。「清水物語」の成功がそのきつかけとなつた。「清水物語」は、簡単には近付けない儒教の倫理を、まことに平明にそして要領よく解説したものであつて、新時代の倫理に飢えていた人々の心をいやしたものであつた。しかもこの解説が、真向から解説のみを説くというのではなくて、一つの小説的形態を採つたという所に人々を引付けるものがあつたのである。かくてこの追随作が数多くあらわれたが、これらに共通する性格は明らかに文学を凌駕した功利性であつて、文学はむしろそれに利用されているという形があつた。しかしそれは必ずしもとがめられるべきではない。何となれば、当時の文学観は、前にも述べたように中世の迷妄の中にまだ在つたのであるから、このような新しい知的欲求に対処し得るものではなく、そこでこのように教義問答という新しい形式に則つて、全く新しいものとしてこの種のものが出て来たのであつた。この形式は不思議な程喝采を浴びた。それはこの種のものが忠実にその形式を守つたばかりでなく、いろいろな他の種類の作品にも応用され、たとえば、遊女評判記の粋不粋論とか男女色優劣論、あるいは「女五経」のような女性教訓書、「是楽物語」のような中世風物語にも侵入しているのを見ても明らかだからである。だが教義問答体は、やはり文学としてみれば未成熟のものであろう。それはあまりにも功利的であつて、小説というには固過ぎる。けれどもこの時代、文学的未成熟は問題ではなかつたのであつて、要はそこに儒教仏教、あるいは道教や神道の教義が平明に誌されているのが急務であり、それで人々は満足した。理論的、あるいは抽象的と云えば、それに過ぎるけれども、新時代の足音はそれ程高かつたのである。そしてこれがまた文学の萌芽であつた。理論はやがて理論だけで終るのである。教義問答体は仮名草子の中だけで花咲き、やがてその中から生活に即した認識が生れた時、それは理論とは全く別箇な具体的な文学形態として実を結ぶことになつた。

さて、平和の到来は、人々にようやく落ち着きを与え、反省の機会を与えた。人々が戦乱の時代をふり返り、それをなつかしむというの

ではなく、むしろ自己の経験としてもう一度認識したい気持に駆られる時、記録文学の流行が生れる。仮名草子で云えば、あるいは大阪の陣をふり返り、あるいは信長や秀吉の英雄的存在を知りたがり、あるいは島原の乱で急に喧伝されはじめたキリスト教に関心を寄せる。また寛永の飢饉、江戸の大火、江戸の風俗にも心を寄せる。これらも一つの知的欲求と云えば云えるけれども、それ以上にニュース的興味が強いのである。しかもこれらは、やはり記録が中心であるので、必ずしも文学的完成を目ざさない。少くとも本格的な小説ではない。だがそれにも拘わらず、素材から云えば新しい文学である。

それからまた名所記文学も、同じような意味で新しい文学であつた。名所記が流行したというのは、町人の享楽性に由来する。そしてまた平和の到来と、商業の全国性もそれに加担する。つまり平和の世になつたから商業が栄え、商業が栄えたから全国が関心の的になり、しかもそれはもつぱら享楽のために存在するような恰好になる。京都の名所、江戸の名所、大阪の名所、そして特に東海道の名所は、町人の興味を引いた。だがこれらの案内は、あくまで案内であつて、元来実利的なものである。それが多少文学に近付くことがあつても、実はその実利性の方が優つているために、文学としては不備であり未成熟である。けれども現象としては新しいのである。やはりここでも文学の巧拙は問題にならない。名所への知的要求が満足されれば、名所記文学は一応その役割を果したことになる。西鶴の小説のように、全国への関心が基底にありながら、その実態を形象的に描くというのではなくて、名所の解説で事足れりとする。その限りでは前の記録文学の性格と少しも変らない。しかしその実利の中に、新時代の息吹きは確かにあつた。

町人の享楽性の最も露骨に表明されたものが、遊女評判記の流行であつた。これも近世の特異な現象であつた。しかしこれもやはり、案内という実利的なものが先立つて、文学としては未成熟なものが多かつた。その中で文学に近付いたものは、他の種類の流行を借りながら幾分文飾を施したけれども、元来がそのようなものであるだけに、ほとんど小説としての体を成すことが出来なかつた。この分野での小説的完成は、西鶴の好色物の出現に待たなければならなかつたが、それにしても遊女評判記の新しさは言うを要しない。これも近世町人がみずから発見し、みずから作り上げた世界であつたからである。

随筆文学は、すでに述べたように、この期のものは教訓性の最も強いものであつた。それは単に自分の覚え書きとして書かれたものではなく、あくまでも読者を予想して、読者によびかけた随筆であつた。それゆえやはりすべての随筆に新時代の息吹きが豊富に見られた。ただそれが小説に昇華しなかつたのは、教義問答体小説と同じく抽象的な理念の世界で事足れりとしたからであつた。大体随筆は文学の中でも第二義的な位置しか与えられていない。それは随筆が常に素材の世界に止まつており、しかも主観がなまの形で吐き出されているので、形象性に乏しいからである。だがそれは、ほかに立派な文学が存在している場合の比較の問題であつて、仮名草子のようにまだ新時代の本格的な文学観が確立されていない時には、この随筆文学もかなり重要な地位を占める。ことに今述べたような新時代の息吹きの見える性格のものならば、これも他の種類のものとある程度同等に考えてよいものであろう。事実「可笑記」は、圧倒的な歓迎を受けた。それはもちろん「可笑記」の重厚な内容に由るものでもあろうが、それ以上に本格的小説のまだ出現しない間隙にあつて、この種の新しさとおもしろさが人々の注目を集めたからであろう。とすれば、仮名草子の随筆も、そう軽々に扱うことは許されないのである。

以上の流行色は、総体的に見てすべて新しく、時代のいろいろな要求に沿つてあらわれた必然的なものと考えられる。そのどれ一つとし

て読者層としての町人の志向にそぐわないものはなく、さまざまの可能性をはらんだ新時代色であつた。ただそれらは、文学という観点からする時に、あまりに功利的であり実利的であり、そして理念的であり、素材的であつて、少くも文学に徹到したものと云うことは出来なかつた。そして文学に徹到したものといえば、わずかに中世風の物語が大量に生産されているのみである。ここに仮名草子の大きな矛盾があつたのである。つまりこれが逆の関係になれば、仮名草子は大きな変革的な意義を与えられたであろうに、残念ながらついにそう成り得なかつた。その原因はもちろんいろいろあるであろうが、一つにはこれが京都中心の文学であつたことにも由来する。伝統文化のふかぶかとした京都、貴族的な雰囲気の京都にあつては、その伝統や雰囲気に押されて、新しいものを多く生みながらも一足飛びの変革を期待することが出来なかつたのである。近世文学が新しく発足するに当つて、先ず伝統文化の都京都において、その遺産を十分吸収しながら成長したことは当然であり、また、合理的であつたとは思えるけれども、それだけにその限界をうち破ることの出来なかつた運命もまた必然的なものであつたようである。しかも仮名草子の読者は新興の町人であつたにしても、作者は多く貴族や僧侶、あるいは武士であつて、いわば中世の上層階級であり、そういう作者たちの保守的な性格もまた変革を阻害したという指摘も出来る。つまり仮名草子は、京都の文学であり、貴族僧侶武士による文学であつたというところに、中世の連続があつて、飛躍の形がなかつたのである。しかしそうは言い切つても、ただ単に古い文学であつたと決めつけることは出来ない。上述のさまざまの流行色は、明らかに新時代の流行色であつて、文学の新しい未来を暗示するものがあり、事実仮名草子時代に作られたさまざまの文学形態が、後世に大きな模範となつたという点を見のがすことは出来ない。その意味では、この時期は一つの創造期であつたのである。流行色はすべて豊かな可能性の表徴であつた。そう考えることによつて、流行色の考究も実は近世文学のさまざまな可能態の考究ということになり、決して無意義なものでないことが明瞭になると思う。

註1　「仮名草子の流行色(一)」（北海道大学文学部紀要3）

註2　この事については拙稿「仮名草子序説」（国語国文研究昭和二六年五月）参照。

附記　遊女評判記の項執筆に当り、山口大学教授小野晋氏より貴重な資料の筆写の便を与えられたことを附記して感謝申上げたい。